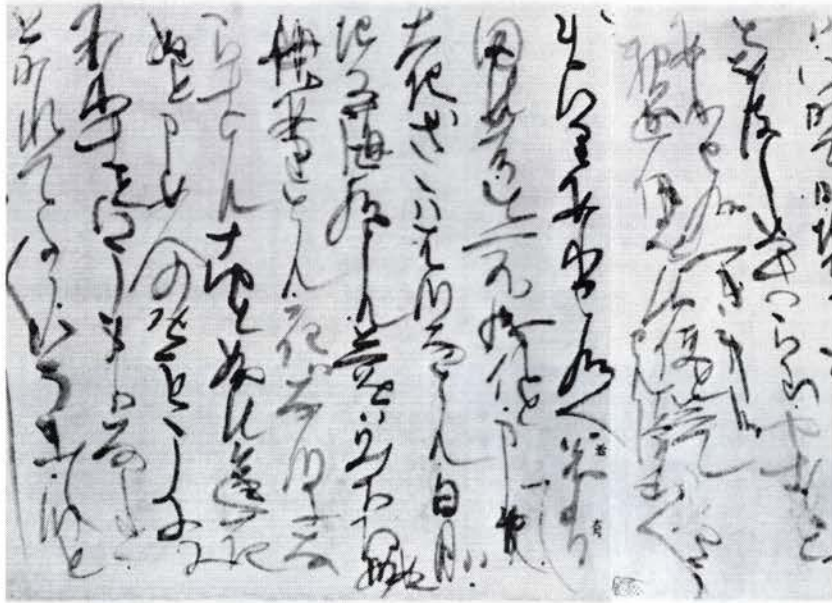




今月の御聖訓



【とをぼしめすらむ。】やすやすと
あわせ給へべき事候。

釈迦仏を御使として、りやう

ぜん浄土へ

まいりあわせ給へ。「若有

聞法者無一不成仏」と申して

大地はささばはづるとも、日月は

地に墮^す給^つとも、し^をはみちひぬ

世はありとも、花はなつにな

らずとも、南無妙法蓮華

経と申^す女人の、をもう子に

あわずという事はなし、と

と^かれて候ぞ。【いそぎいそぎつと^等】

【上野尼御前御返事 全集一五七六頁】

目次

今月の御聖訓

卷頭言	菅野憲道	1
お話し話「日蓮大聖人と南条時光」	菅野憲道	2
御書と日興上人〔192〕	松田銘道	8
【採過拾新録】「日蓮正宗の家に生まれて」	奥 はつ	10
付、西嶋祐子さんのお手紙		13
【所感】「法華経 人それぞれの見方」	森 秀之	14
読書案内『見えないものを探す旅』	松田銘道	17
《質問箱》〔12〕		18
お話し話		19
九月の行事 長月詠草 恵日俳壇 訃報		

巻頭言

独裁制の災禍

菅野 憲道



独裁制が多くの災いをもたらしてきたことは例証をあげるまでもない。もとより一人の人間が、内政・外交・経済、社会・科学技術・学術・芸術文化などあらゆる方面に精通し、各分野における政策決定の鍵を握るなどできるわけがない。なのに人は多くの権限を集中したがる。集中すれば、誤解や短慮、怠慢などと重なって度々ミスをおかし、結句は致命的な失敗を侵すことになる。

もしこれを敢行すれば血縁・地縁・学閥などの同族が要職を独占する情実人事が当然視され、能力と志の人物は、却つて、独裁者の地位を脅かしかねないので要注意人物となる。

独裁者より人望のある者や、経綸・見識にすぐれた者も危険人物となる。

独裁者は何時でも造反者に手を焼いているから、人間不信に陥り、人を信用しないし、内部の者でも敵と同様にみている。独裁者には残酷性があるから側近達はいつでもピリピリしている。

独裁者はゴマすり的大好きだから、取り巻きは自然ゴマすりばかりになる

独裁者は弱い者には強く、強い者には弱いから、反撃してきそうな人物はさける。

独裁者は孤独である。

独裁者は用心深い。

独裁者は声が大きい。人を服従させるには恫喝することが有効だから。

独裁者は自己の行為を正当化するのに勝れ、例え失敗しても反省することはない。

独裁だと思っても気づいたときは手遅れで、口には出せなくなっている。

お講講話(要旨)

拝読御書 「上野殿御返事」(全集一五六七頁)

日蓮大聖人と南条時光

菅野憲道

《南条兵衛七郎の帰依》

本日は、「上野殿御返事」を通して、日蓮大聖人と南条時光の事についてお話しします。

拝読の御書は、大聖人晩年の弘安三年九月六日に南条時光殿に宛てられた御書です。この本文の冒頭に、

「南条七郎五郎殿の御死去の御事、人は生まれて死するならば……」(全集一五六七頁)

とあり、末尾の宛名書きは「上野殿御返事」とあるように、富士上方の上野郷の領主で南条名字の若き武士が賜った消息文です。またその通称は所領の地名によって「上野殿」とも称されます。

これは「実名敬避俗」といって世界各地で見られる伝統的な風習で、目上の人や貴人を実名で呼ぶことをタブー視して、官途や官職名、地名や住居、寺号坊号などで呼ぶものです。

また、このご消息の内容は、時光とは七つ違いの弟・七郎五郎が、急病で他界したとの知らせを受けてのお悔やみ状ともい

えるものです。

南条家は、もともと伊豆菰山・南条の地下侍で、北条幕府の御内人と呼ばれた得宗被官(北条氏嫡流家に使える家臣団)の家筋で、その一族の縁者と思われる氏名は吾妻鑑の中にもしばしば出ております。

その南条一族の兵衛七郎が大聖人に帰依するようになった時期ですが、大聖人が「立正安国論」を幕府に進覧(文応元年・一二六〇)した頃と考えられます。その理由は、翌年、大聖人は伊豆流罪に処せられて、足かけ三年の間不自由な流人生活を送り、鎌倉に戻られたのは弘長三年(一二六三)のことでした。しかし、平穏な日々が戻ることはなく、翌弘長四年には東条郷松原の大路で地頭・東条景信の率いた兵団の襲撃に遭い、多勢に無勢で危うく生命に及ぶところ、弟子檀那の二人を失い、自らも傷を蒙りましたが、何とか危地を脱せられました。居所を転々として、負傷の治療に当たられたらしく、当地には何力所もの「傷洗いの井戸」の伝承が残っております。

文永元年十二月のお見舞い状の時点では、兵衛七郎一家は病

のために富士に帰っており、翌文永二年三月に兵衛七郎は逝去されました。それにともない大聖人御自ら下条高土たかんどの新墓に参られたのでした。

大聖人と南条兵衛七郎一家との出会いと
帰依は、

「かまくらにてかりそめの御事とおもいまいらせ候……」（「南条殿御返事」全集一五〇七頁）

「故なんじょうどのはひさしき事にはそうらわねども……」（「春之祝御書」全集一五一〇頁）

との文面により、伊豆流罪以前の可能性が大となります。

すなわち(1)鎌倉での教化。(2)兵衛七郎の逝去した文永二年よりそう遠くない時期、この二つの条件に合致する時期ということ。これをかりに文永元年とすれば、値遇を得てから間なしのことに成り、故兵衛七郎賜書の五綱判など新入門者にはやや難解な教義の記述は不自然さが残ります。また、宗祖がわざわざ富士まで墓参に打ち下るほどの思いが、一年ほどの間に幕府に仕える武士との師檀関係の中で育てられたとも思えません。蛇足ながら、弘長年間には伊豆の伊東祐光の監視下にありましたから、やはり、文応元年の立正安国論進覧の時

期が妥当と思われる。



南条家の邸跡に建立された妙蓮寺（下条）

《南条母子の信心継承》

安国論のことは幕府内および鎌倉市中で噂となり、草庵焼き討ちもありましたが、これをキツカケに帰依した人々の一人に御内人の南条兵衛七郎がいたものと思われます。

ところが惜しいかな南条兵衛七郎は男盛りの時、病いに冒され、文永二年にその生を終えたのでした。時に次男の時光はまだ七歳で、その弟の五郎にいたってはまだ夫人（妙蓮）のお腹の中でしたから、尼は夫の死を悲しむまもなく、多くの幼子（九人とも十一人とも）のためにその日その日を精一杯生きるほかなかったのです。

以上のことをまとめると、文応元年頃に帰依した南条兵衛七郎だったが、自身の健康上の問題と、大聖人の伊豆流罪や謗徒の襲撃事件等で不規則な多忙な日々が続き、十分な教化に預かれないうちに死去して、残された母子も富士に移って縁遠くなっていました。さらには佐渡流罪で、南条母子とのつながりはうすれていったのです。ところ

が、文永十一年五月、佐渡流罪から赦免されて鎌倉に戻ってきた大聖人は、幕府を改めて諫言しましたが、幕府は懐柔策を弄して聞く耳を持たなかったのです。そのため大聖人は故事に倣って身延山中に隠棲し、将来に望みを託すこととされたのです。そこで、甲斐源氏の南部（波木井）氏の招請によって、とりあえず身延山中に草庵を構えられたのです。

その際、大聖人の一行が鎌倉から竹ノ下を通り富士大宮を通り、富士川沿いに遡上して身延山中に入り（「富木殿御返事」）ましたから、南条氏の所領の南方を通過されたわけですが、それも、高橋氏や松野氏など多くの檀越のおられる地方ですが、いずれの館にも寄らずに急いでゆかれたのは、大聖人のゆくところ必ずといってよいほど怨をなす誘徒が待ち受けていて、足を留めると、彼らも巻き込まれることになりかねないとの気遣いがあったのでした。

住まいの近くを通られたうえ、波木井氏の所領に山居なされると伝え聞いた南条親子は、さっそく時光が母の意を受けて大聖人に久闊を叙すべく参られたのです。

大聖人は十六歳になった時光を見て初めは驚かれ、次には心から喜ばれたことでしょう。しばし故父の兵衛七郎との懐旧の思いと、七歳だった少年の成長ぶり、そして何よりも様々な困難があつたらうに、大聖人の教えを守って信心を捨てなかつたことへの賞賛といたわりがこの時のご消息にもよく現れております。約十年以前の教化の種が、永い空白期間を経てようやく芽吹き初め、やがて大樹に育っていくように、文永十一年の上野殿後家尼御返事は、南条親子との師檀関係が復活して、以降

大聖人の直接の訓育によって、俗弟子を代表するほどの法華衆に育っていった記念すべ御書なのです。

ちなみの大聖人と南条家の交流を窺うために御書の数を拾いだして一覽表にしてみました。精確なものではありませんが、おおよその見当はつけられるものと思えます。

西曆 年号 月日 事項

一二六〇	(文応元年)	〇七・一六	立正安国論を進覽
一二六一	(弘長元年)	〇五・一二	伊豆流罪
一二六三	(弘長三年)	〇二・二二	流罪赦免、鎌倉帰住
一二六四	(文永元年)	一一・一一	小松原法難
一二六四	(文永元年)	一一・一三	南条兵衛七郎殿御書
一二六五	(文永二年)	〇三・〇八	南条兵衛七郎没

同年

宗祖上野郷高土之墓ニ参

ル

同年

七郎五郎誕生

一二七一	(文永八年)	〇九・一二	竜口法難・佐渡流罪
一二七四	(文永十一年)	〇七・一一	上野殿後家尼御返事
一二七四	(文永十一年)	〇七・二六	南条後家尼御前御返事
一二七四	(文永十一年)	一一・一一	元寇 上野殿御返事
一二七五	(文永十二年)	〇一・〇一	春の祝御書
一二七五	(文永十二年・建治元年)		賜書八通
一二七六	(建治二年)		賜書五通
一二七七	(建治三年)		賜書三通
一二七八	(建治四・弘安元年)		賜書十通

- 一二七九（弘安二年）
- 一二八〇（弘安三年）
- 一二八一（弘安四年）
- 一二八二（弘安五年）

熱原法難 賜書六通
七郎五郎死去 賜書八通
元寇 賜書六通
賜書九通

このように、建治、弘安期には、頻繁に御書を頂いております。その内容も、佐渡以降の本門寿量文底の法門を基調に、若き時光や母尼の境界に應じた教訓が記されており、ご金言がいたるところに見いだされる珠玉のご消息類であります。

また、御書集のうち主な檀越に宛てられたご消息等を数えてみますと、南条氏賜書五五通、四条氏賜書三七通、賜書富木氏三〇通（以上親族分を含む）という数字になります。勿論単純に数字を比較するだけでその傾向を云云することは出来ませんが、ご門下における南条氏の位置を知る一つの視点にはなるかと思えます。

というのも弘安期の飢渴、疫病、大雪などの困苦の中、南条家の身を切るような献身的な月々の供養と、大聖人の南条一家に対する親も及ばぬ慈愛の心など、富木氏や四条氏などに伍する大檀越に成長する過程もよく分かるのであります。



「竜門御書」（上野殿御返事）の末文

中でも熱原法難は、平左衛門ら幕府権力から門下大衆へのなりふり構わぬ宗教弾圧でした。このとき南条時光も捕縛を脱れて潜行中の神主を匿うなど、身の危険を省みずに熱原の法華衆を支援しており、一方では大宮造営にあたって幕府から非分の賦課をかけられ、経済苦に陥ったうえ、親族や上司、先輩などからも猛反対を受ける中で、法華経の御本尊と法華経の行者日蓮大聖人への信をつらぬき、供養を絶やすことはなかつたのです。

勿論こうした数々の窮地を若き時光が無事に脱することができた陰には、たびたび日興上人を使者として事細かな指導をされた大聖人の存在は大きいのですが、大聖人と南条時光の間には諸難に立ち向かう過程で真の師弟関係が育まれ、親子のような感情が育つていたに違いありません。

公に対して、宗祖は「竜門御書」（「上野殿御返事」）を認められ、上野「賢人」殿と激賞せられるとともに、いまこそ一生成仏を賭けた不退の信心を貫く時だと厳誠されて、正法護持に生きた熱原法華衆の信心を受け継ぐよう訴えられたのでした。「竜門御書」の末文を掲げます。

「願はくは我が弟子等、大願ををこせ。去年(こそ)去々年(おとし)のやくびやう(疫病)に死にし人々のかずにも入らず。又当時蒙古のせめにまぬかるべしともみへず。とにかくに死は一定なり。其の時のなげきはたうじ(当時)のごとし。をなじくはかりにも法華經のゆへに命をすてよ。つゆ(露)を大海にあつらへ、ちり(塵)を大地にうづむとをもへ。法華經の第三に云く「願はくは此の功德を以て普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」云云。

恐々謹言。

十一月六日

日蓮(花押)

上野賢人殿御返事

此れはあつわらの事のありがたさに申す御返事なり。」

(全集一五八九頁)

《七郎五郎の急死》

ここからが、拝読御書の弘安三年九月六日「上野殿御返事」の話です。これは南条家からの訃報に対するお悔やみ状なのです。

ちようどのこの三ヶ月以前の六月十五日に南条七郎次郎と弟の七郎五郎の二人は轡くわを並べて身延山中までお参りに来ていたのです。二十四歳と十六歳の兄弟は、大聖人の印象からも、見た目もりりしく、心根も素直で気が利く好青年だったようです。先の熱原法難での活躍もありましたから、兄弟には大いな期待をかけられたでしょう。

ところが、熱原の事件もうやむやのまま放免されて、南条時

光には男の子が誕生するなど、ようやく平穩な日が戻って来たかに思われたころ、何としたことか、九月五日に弟の五郎が急死したという悲報がもたらされたのです。大聖人は即座に返事をしたためられるのですが、驚きと戸惑いで、途中で筆を進めることが出来なかつたのです。

「南条七郎五郎殿の御死去の御事、人は生まれて死するならば、智者も愚者も上下一同に知りて候へば、始めてなげくべしをどろくべしとわをぼへぬよし、我も存じ人にもをしへ候へども、時にあたりてゆめかまぼろしか、いまだわきまへがたく候。まして母のいかんがなげかれ候らむ。(後略)」(全集一五六七頁)

といって夫の兵衛七郎に死別した後生まれられた五郎が、今はようやく立派に成長してこれからという時にみまかつて、頼りにしていた尼の歎きを思うと、感極まつて、

「あやなくつぼめる花の風にしぼみ、満月のにわか失せたるがごとくこそをぼすらめ。まことをもをぼへ候はねば、かきつくるそらをもをぼへ候はず。又々申すべし。」(同)

と、書くべき言葉も見つからず、常には法門の数行でも書き付けける所、それもなまに筆をおかれたのです。大聖人は遣いのもたらした文と口上だけでは五郎の死を受け入れられなかつたのです。

この御書で仰せのように、この世に生まれてきたからには必ず死を迎えることは誰でも知っていますが、日頃慣れ親しんだ肉親が亡くなると、誰しも、「本当だろうか」「夢を見ているのでは」などと何度も思い返したりするものです。自然に涙が

滲んできたり、わけもなくため息をついたり……。人生観は動揺し、現実を受け入れるのはそう簡単ではありません。

この時期に南条親子に宛てられた御書が他にも数編あります

が、いかにも南条家の人々の心に寄り添った内容が書かれておますが、紋切り型にこの世の無常なる諦観を説くわけではなくて、人の世の無常を改めて実感されて、大聖人ご自身が戸惑いと驚きがそのまま表れております。

その中の一編に「上野殿母尼御前御返事」と題された、同年十月二十四日付けの、母尼に宛てた御書があります。

この書は四十九日追善供養の御返事で、二十九紙にわたる長文の書だったようです（ご真蹟は断簡のみで、写本で伝わる）。

この書は大聖人はご自身の病も忘れて何とか母尼を慰めようと法華経をはじめ、様々な仏典、説話を引用して故五郎殿の成仏を証するお姿が彷彿として浮かんでまいります。たとえば、

「乞ひ願はくは、悲母我が子を恋しく思し食し給ひなば、南無妙法蓮華経と唱へさせ給ひて、故南条殿・故五郎殿と一所に生まれんと願はせ給へ。一つ種は一つ種、別の種は別の種。同

じ妙法蓮華経の種を心にはらませ給ひなば、同じ妙法蓮華経の国へ生まれさせ給ふべし。三人面をならべさせ給はん時、御悦びいかがうれしくおぼしめすべきや。」（全集一五七〇頁）

というくだりなどは、もう二度と会えないと思つてゐる尼にとつて大きな救いになったでしょう。

しかし、故五郎殿は見た目も心根も好ましい青年であると思うほどに悲しみはまし、故五郎殿との過ぎし日々を思ひ出すほどに母尼の歎きもいや増すのですから、結局母尼とともに無常を痛感するほかなかつたのです。この書の末文は、

「父はりやうぜん（靈山）にまします。母は娑婆にとどまれり。二人の中間にをはします故五郎殿の心こそ、をもひやられてあわれにをほへ候へ。事多しと申せどもとどめ候ひ了んぬ。」（全集一五七三頁）

と述べられて、死にゆく五郎の悲しみをも共有される大聖人のお心をありのままに表現してこの長いお悔やみ状を終えられたのでした。母尼には十分ないたわりだつたにちがひありません。

（本日はここまでにして、またの機会に譲ります。）
南無妙法蓮華経

（了）



南条家の墓所

〔御書と日興上人(一九二)〕

「立正安国論」書写と「安国論問答」(一二四)

松田 銘道

前回は、大黒喜道氏が「宗祖教学体系における三大秘法の位置づけについて」

(『興風』27号)との論文から、宗祖の晩年の信仰世界の実際について、日蓮宗と日蓮正宗との相違について検証してきました。今回は、前回に引き続き、大黒氏が論文で指摘した、

「これからはより細かい見方、たとえば一年単位とか数ヶ月単位でその思想的な動きを見ていくという作業をして行かなければ、宗祖の晩年の信仰世界の実際はなかなか見えてこないのではないか、とも思われるのである。」

との問題についていきます。同論文では、「一年単位とか数ヶ月単位の考察について、具体的なことは何も提示していませんが、二年後の「理事

の一念三千と妙法五字の関係」(『興風』29号)との論文では、「宗祖遺文における理事の一念三千と妙法五字」との項目を設け、「妙法蓮華経の五字」の撰

撰について、考察しています。そこでは、①『一代聖教大意』正嘉二年の「今の妙法とは云云」等のご文。

②『唱法華題目抄』文応元年の「題目を書きて云云」等のご文。

③『法華経題目抄』文永三年の「題目計りを唱ふる云云」とのご文。

④『十章抄』文永六年の「口ずさみには南無妙法蓮華経云云」とのご文。

⑤『開目抄』文永九年二月の「一念三千の法門は云云」とのご文。

⑥『観心本尊抄』文永十年五月の「妙法蓮華経の五字に具足す云云」等のご文。

⑦『兄弟抄』建治二年四月の「妙法蓮華経の五字の蔵の中より云云」等のご文。

⑧『四信五品抄』建治三年四月の「題目許りを唱へしむるや云云」等のご文。

⑨『治病大小権実違目』弘安元年六月の「一念三千の観法に二あり云云」等のご文。

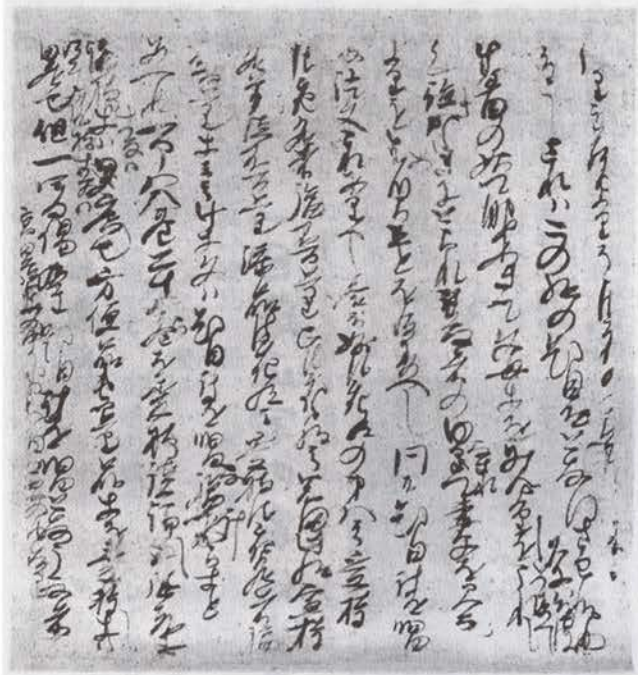
⑩『本尊問答抄』弘安元年九月の「『法華経』の題目を本尊とするや云云」等のご文。

以上の、真撰書等が伝わる確実な十編の御書から考察しています。

その中、①から⑨までと⑩に関して、「一念三千についての記述はこの「本尊問答抄」が書かれた三ヶ月前の「治病大小権実違目」でおよそ終焉したので、当然本書には一念三千の語は記されていません。」

と、一念三千に関する記述は、①から⑨までで、⑩には示されていない、と指摘しています。その検証を踏まえ、⑩の『本尊問答抄』について、

「本書の最も大きな特徴は右⑦(⑧)『本尊問答抄』の前半に『釈迦を以て本尊とせずして、法華経の題目を本様の御心



文永三年の『法華經題目抄』（真蹟断簡十四箇所分蔵）。大黒氏は、『法華經題目抄』に関して、「文永三年頃までに言及される十界互具および一念三千は、もっぱら天台大師が『摩訶止観』第五巻に説いた一念三千法門、つまり理の一念三千に限られているものと想定される」との見解を示している。

尊とする』と明言されて、釈迦像を拒否して「法華經」に十界曼荼羅を本尊と定めたことにある。これはちようど五年前の『観心本尊抄』において、末法流布の本尊として釈迦像と十界曼荼羅の二者が併存した状況とは大きく異なるものであつて、恐らくこの弘安元年四月の『上野殿御返事』の『今、末法に入りぬれば余經も法華經もせん（詮）なし。但南無妙法蓮華經なるべ』という仰せや、同年五月から六

月にかけての^{ボロン}字花押から^{ホロン}字花押への変化、更には同年八月の『曾谷殿御返事』、通称『焼米抄』に説かれる五味主の教判等に見られる極めて強い『法華經』および題目の独勝が本尊義に及んだ結果では無いか、と推測される。一
との見解を示しています。ここには、『本尊問答抄』では釈迦像を拒否し、『法華經』に「十界曼荼羅」を本尊と定めている。

の本尊観の相違が示される要因として、弘安元年四月の「上野殿御返事」の「但南無妙法蓮華經云云」とのご文。
・弘安元年五月から六月にかけての^{ボロン}字花押から^{ホロン}字花押への変化。
・弘安元年八月の「曾谷殿御返事」の五味主の教判。
以上のように、弘安元年には「『法華經』および題目の独勝」が示されていると指摘しています。
このような考察から、『観心本尊抄』と『本尊問答抄』に、同じ「普賢經」の二つの經文が引用されていることに関して、
「『本尊抄』の方がもっぱら『法華經』だけが仏種を具有するという『具足義』に焦点を当てた引用であったのに対して、右の④（④『本尊問答抄』）の後半ではその意が『仏は所生法華經は能生。仏は身なり、法華經は神なり』と取られているように、『法勝人劣』および『法華独勝』の証文として引き載せられているのである。」
と、『観心本尊抄』に『具足義』、『本尊問答抄』に『法華独勝』との相違が示されていることに注視しています。

・『観心本尊抄』の釈迦像と十界曼荼羅の二者が併存した状況とは大きく異なる。
このように、『観心本尊抄』での二つの本尊観から、「十界曼荼羅」を本尊と規定されたことに注視していただきます。また、そ

・『観心本尊抄』の釈迦像と十界曼荼羅の二者が併存した状況とは大きく異なる。
このように、『観心本尊抄』での二つの本尊観から、「十界曼荼羅」を本尊と規定されたことに注視していただきます。また、そ

【採過拾新録】

故 奥 は つ

「日蓮正宗の家に生まれて」

《寺報「正道」平成五年六月号より 抜萃》

私は、能勢広基寺の檀家に生まれまして、昨年お正月にいただきました、源立寺の縁起の末尾に記されている所を拝見しますと、広基寺の称号は明治十三年、源立寺第十二代日意御尊師の時に、公称されたようであります。

そして、初代の井上広頼坊というのが、私の祖父の兄に当る方です。これは、私が生まれる二十数年昔のことで、広頼坊という方は、古い写真で知る以外に記憶はございません。但し、その妻であった「ユウ」という方は、自ら妙猶と称しており、他人も亦妙猶さんと呼んでいたの

を記憶していません。

この大祖母妙猶は、大正五年、私が十才の時に、八十余才で亡くなりました。篤信家であったこの大祖母の感化は、私の三つ児の魂にいくらかしみついております。

私が幼児の頃、私の家は貧しく、両親には財産もなく、その日稼ぎを致しておりました。大祖母は、朝夕五座三座の勤行をきちんと行っておられました。家事は一向になさらず、暇があれば広基寺へ詣っておられました。

私の母は、この大祖母に、幼い私を託

して働きに行っていました。何回も何回も、同じ昔話をせがんだり、人形を縫ってもらったり、絵を描いてもらったりしたことを、今も覚えています。

「別冊御書抜萃」には、「明治三十八年 中島ゆた」と記されています。これは、この大祖母の孫娘ですが、孫娘にこうしたものを書かせる程に、信仰心の強い人でした。

その日その日の生活に追われていた私の両親は、朝夕の勤行も致しかねておりましたが、新世帯をもった時に、この御本尊を大切にせよといつて、自分が明治三十二年、六十二世日応上人より、大石寺修復の寄付によりいただいた御本尊をくださいました。今私の家にあるのは、その御本尊です。

私が小学校に上るようになって、少しましな成績であった時にも、母を戒めて申しました。

「決して自分がよい子を生んだと思うな。すべては大聖人様のお陰である」と。又苦しいことに出会った時にも、

「大聖人様の御苦行に比べたら、こん

な事位は辛抱しなくてはならないのだよ

と、諭しておりました。

大祖母は、前にも申しましたように篤信家であつただけに、自分の一人娘を嫁にやる時にも、相手方を正宗に改宗させ、村中でただ一軒、京都の住本寺檀家になつてもらつて嫁入りさせた程で、この婚家先の方は、広基寺にもよく参詣していられたようです。

しかし、信心は強盛であつたけれども、封建的な家のしきたりは、長男本位、家本位で、家族全員の幸福を考へる家庭の経営に於ては欠けるところがあり、長男の病没後、この家はすっかり傾いてしまいました。

顧れば、百年近い歲月の間、広基寺檀家の上にも、いろいろな変遷があつたようです。倉垣問答に勝つて、正宗の威力を見せていた頃の、明治十年代、二十年代には、約二十軒位の檀家があつたよう

ですが、今その名簿を見ると、もとの妙法寺（日蓮宗）へ移つた家も少数はありますが、土地を離れてしまつた家が十軒位あります。

このように、檀家は少くなりましたけれど、広基寺は滅びは致しませんでした。畑様御両家、中西様御両家、井上家、私



故 奥はつさん

方と、現在六軒ですけれど、子供の頃から、お正月にも春秋のお彼岸にも、お盆にも参詣致しまして、僅かの講中だけに、家族のような親しいおつきあひをして参りました。同じ日蓮正宗につながるものの、あたたかさや力強さを失うことなしに、今日まで細々ながら法灯をと

もして参りました。

これ偏に、源立寺代々の御住職のお力もございます。私が存じあげているのは、秦俊明師、浅井広龍師、高玉広応師、向島秀浩師、現在の菅野住職と、益々強い御支援を得ることが出来まして、望外のしあわせで御座います。殊に現在は、毎月七日に、わざわざこの少い檀家の為におはこびいただき、住職の御指導により御書の御講義が伺える等と、喜びに堪えません。

私は、正宗に生れ、育つたことにより、次のように考へております。小さい頃から謗法を戒められていましたので、あらこちらへお参りすることは致しません。何事にもあまり迷いません。たとえば建築をするにしても、やれ方位がどうの、何のとよく見てもらいに行く人がありませんけれど、そんな事は一度もした事ありません。お仏壇に向つて御相談は致しますけれど、自分の信ずるところに随つて、今日まで進んで参りました。

学校卒業、就職と同時に大病に罹り、生命の危機に立つた事もございます。又

戦争が激しくなつて夫を戦地に送り、老親を故郷において、夫の任地の近くの学校に勤め、いつ天涯孤独になるかも知れない境地に立ちながら、すごした七年間のひとり住まい、さては夫戦死の後に、老母と遺児を抱えて、職場と食糧増産に奮闘してきた思い出等、他人は私を不幸だと思つて下さいましたけれど、すべての困難に堪えてくることができたのは、決して私自身の力であつたとは過信できません。私は生きてきたというよりは、生かされてまいりました。

幼い頃の私の魂に残した大祖母の言葉のように、大聖人様のお陰で生かされて参りました。苦しい時、忙しい時にも、それに堪え得る健康を与えられている事に感謝して、私は自分の境遇をかこつたりは致しませんでした。愚痴をこぼすよりも、どうすれば愚痴がなくなるかを考えて実行することにしていきます。いつ如何なる時にも、

「与えられた環境に於て、最善を生きる」
ことに心がけています。

私も、すでに七十代の半ばを迎え、身体は日に日に老化の一途を辿っていきます。私の周辺、いや日本の国を見まわしても、高齢人口は益々多くなつていきま



広基寺のお会式（平成22年頃）

す。私一個の安らかな臨終を座して願うという外に、今私は、老人として如何に生きるかを考えています。佐藤一斉翁の言葉に、

「少学則壯有為 壯学則老不衰 老学則死不朽（少にして学べば 則ち壯にして為すこと有り 壯にして学べば 則ち老いて衰えず 老いて学べば 則ち死して朽ちず）」

というのがありますが、肉体は老化しようとも、精神的には前進を求めることによつて、僅かでも成長ある人生を送りたいと思ふのです。

それが、いつ臨終が来ても悔いの少い生き方につながるのではないでしょう。か。十代で終りになっていたかも知れない私の命が、今日こうして健康に生かされているという事は、大聖人様の限りないお慈悲でもあり、私を今日までに育ててくれた両親の恩、あらゆる人々の大きな恩の賜です。

私は、私に与えられた健康と、ささやかな力を社会に還元することを考えています。私のささやかな努力が、私をとりまく人々の上に、僅かでも幸福をもたらすものであるならば、私も亦しあわせてあります。

こういう考えで生きることも、大聖人

に副い奉る所以ではなからうかと思うのですが、如何なものでございましょうか。私は、未だ信心も浅く、修養も至りません。今日発表の機会を与えられましたことを幸いに、平素考えていますことの一端を述べて、御導師を始め皆様からの御指導を賜りたく存ずる次第でございます。

(おく・はつ)

奥はつさんの発表に、西嶋祐子さんが感想のお手紙を寄せられていますので、併せてご紹介させていただきます。
〔西嶋さんは、豊能地区 田中靖子さんのご長女です。〕

奥 ハツ様
拝啓

氣候不順のおりから、その後お障りもなくお過ごしでいらつしやることと存じます。

突然、お手紙を差し上げます非礼、なにとぞお許し下さいませ。

私は、先日、源立寺にて、奥先生のお話を聞かせて頂きまして感激し、思わずペンを取った次第です。

私には、三歳半になる娘が居りますが、保育園へ預けて勤めに出て居ります。奥先生のお話を伺って、忙しい毎日の中で忘れかけていたことを思い出した気持ちが致しました。

私も昨夏、急病で二週間足らずの入院生活を致しましたが、奥先生の入院中に



西嶋祐子さん

詠まれたうたを拝見し、自分自身を省みて、恥ずかしく思われました。

まごころも感謝も全て過去の出来事になってしまつて、すっかり忘れて居りました。今になってあれこれ反省しております。

熱心に源立寺へ参詣する両親を横目に、「私もその内……」

などと思つておりましたが、最近になつて、ようやくお寺へ行く喜びが少しずつですが、わかつてまいりました。そして、先日の奥先生のお話を伺い、お姿を見て、この仏法を信じて、大聖人様の教えを勉強してゆこうと、決心致しました。

そして、いつの日か、私の姿を見て、娘も信心してくれることを願います。私が両親を見て、そう思つたように……。

母が、御住職よりお借りしてまいりました「道」も拝見させて頂きました。四年前に亡くなりました、私の大好きだった祖母も、古い帳面によく短歌を綴つておりましたので、祖母のことを思い出しながら、読ませて頂きました。

本当に貴重なお話をありがとうございました。どうか、おすこやかに暮らしのほど、

はるかに祈り申し上げます。まことに失礼ながら、書中にてお礼申し上げます。

悪筆、悪文、誠にお恥ずかしいことに存じます。

平成五年七月二十二日

西嶋祐子

敬具

【所感】

法華經 人それぞれの見方

大阪地区 森 秀之



森 秀之講頭

大聖人は、
「今の法華經の文字は皆生身の仏なり。我等は肉眼なれば文字と見るなり。たとへば餓鬼は恒河を火と見る、人は水と見、天人は甘露と見る。水は一なれ

ども、果報にしたがて見るところ各別なり。此の法華經の文字は、盲目の者は之れを見ず、肉眼は黒色と見る。二乗は虚空と見、菩薩は種々の色と見、仏種純熟せる人は仏と見奉る。」
（「法蓮抄」全集一〇五〇頁）

と仰せですが、私自身がこの御書を拝して、ふと、文字は読めていても、はたしてその真意を感得することはできていないのだろうか、と思いました。

最近の風潮では、「以心伝心」という語は、すでに死語になりつつあることに気づきます。パブルが弾けた一九九〇年代に入ってから、コミュニケーション、

コミュニケーションと言われるようになり、やたらとハウツー (How to) 本が出てきたように思います。

そんなことより、先日、『こども読解力』（斎藤孝著）というタイトルの本に、「現代人は、大人も子供も文字は読めるが、意味が理解できない、また行間も読めない。さらに本質も見極める力、読解力が明らかに劣ってきている」といつているのを見て、私も自身に当てはめてみて、指摘の一節を読みながら、改めて納得できる内容だな、と感じました。

またそのことで、日本人の識字率は、世界でもトップで、しかも漢字・ひらがな・カタカナ・アルファベットを操る、リテラシーの高い集団ではなかったのか。現代の子供たちは、ネットやスマホも普及し、文章に接する機会は増えているはずではなかったのか。といった感情も、

私には涌いてきました。

そして、その実情をいえば、文字は読めるが考えるという作業ができていない人が増加している、ということだと思っただけです。

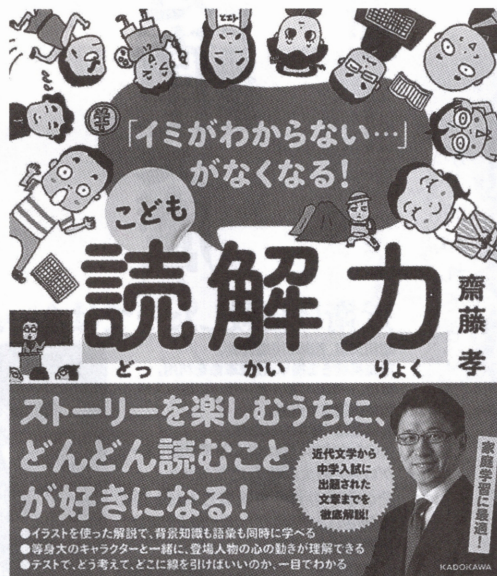
その影響かどうか分かりませんが、それがこと会話となると、内容より言葉尻に反応する傾向にあつて、マウンツの取り合いに終始して、会話が枝葉末節になつていくようです。

私自身が関わっている職場の、会話や色々な場面を思い起こした時に、何度も言い返す、確認することが、年代に関係なく、大変多くなつていて、強く感じています。

失われた三十年といわれる、昨今を振り返ってみると、文章表現が伝わらない、会話がギクシャクすることについて、ある時まで私は、世代間ギャップという言葉

葉で片付けていたように思います。

しかし、それは誤った見方で、世間の価値観が「今だけ、金だけ、自分だけ」という風潮、国やマスコミが自己責任というワードを喧伝するようになった、バ



斎藤孝著『こどもの読解力』

ブルが弾ける一九九〇年代の頃より、加速していったのではないかと思つています。

その後、阪神淡路大震災、東日本大震災と、自然災害に見舞われて以来、分断、対立の意識から、家族や世間におい

て「絆」ということが、取り上げられたことで、慈愛や共存の意識を、改めて思い出させてくれるきっかけとなり、人が繋がって生かされていることの大事さを、取り戻すきっかけになったように思います。

しかし、その後親中派の思惑によって、インバウンド政策が進められ、民泊ブーム等で経済が潤いかけましたが、そのことも今度はコロナ禍という疫病と、そのワクチン等による弊害も起こっています。

コロナでの三年間の自粛生活において、ある意味、一人ひとりが内向きに自身を見つめ直すことができたのは、良いことだと思えますが、それ以上にSNS（インターネット上で構築される社会的ネットワーク）の進化により、世界の情報が、善悪は別として瞬時に入手できる、簡単に誰とでも繋がることのできるツールが

増えました。

自分で発信できるツールとして重宝され、本業、あるいは副業として、ビジネスにユーチューバーとして簡単に参入でき、生計まで立てられることで、子供でも少し動画が「バズった（ネット上で、多くの人から注目を浴びること）」りすると、親の収入を遙かに超えてしまうという現象が起きるということも聞きます。

企業としては、事務作業等については、出社せず、自宅で行うことができ、在宅で行うことで合理化でき、人々が徐々に機械的に組み込まれて来ているように思います。

対人間関係についても希薄になってきて、誰しも面倒なことには関わりたくない、という社会になってきたように感じ

ます。

最近読んだ、『近衛文麿 野望と挫折』（林千勝著）にも、今の社会の様子を見ると、戦前の日中戦争へ突入する直前の状況と似ている、と指摘しています。私は、戦後生まれですので、具体的に

近衛文麿 野望と挫折

林千勝

近衛文麿研究家
ノンフィクション作家

近衛は自殺したのではない!

昭和天皇、陸軍、尾崎勇突、東條英機らを擁り、敗戦革命を利用。戦後、一転してマッカーサーに取り入り、天皇退位まで画策。大望を抱く近衛だったが、彼のシナリオは思わぬところで破綻する。グローバルイズム勢力に支配され、その傘下の共産主義勢力(反日分子)に浸透された戦後日本政治の原型は、近衛政権にあり!

昭和史の間!



林千勝著『近衛文麿 野望と挫折』

何がと問われても、はつきりはいえませんが、政府もマスコミもおかしい、と感じています。

今マスコミは、ジャーニーズ喜多川氏の性加害者認定の報道を、やっとするようになりましたが、このような時には、必

ず裏では何か大きな課題が隠れていることが、この国には多いように感じます。

「人それぞれの見方」というタイトルから、まったく内容は脱線してしまいましたが、私たち信仰する者も、生活空間の中に起こる色々な事象に、一喜一憂することがありますが、瞬時、瞬時に、南無妙法蓮華経にすべてお任せするという覚悟と、立正安国の精神は、常に肝に銘じて精進したいものと思います。



本書は、「能楽師・安田登が時空を超える精神の旅へといざなう」と紹介されている。舞台でワキ方として国内はもとより海外での公演に向き、そこで出会った体験を能の世界を通して綴ったエッセイ集。「まえがき」には、

「私たちには、『見えないもの』を見る力が備わっています。『目』を使わないでもものを見る力です。そのひとつが『夢』です。夢を見ると、人は器官としての目を使いません。夢を『見た』ということは他者に証明することはできませんし、見た夢を共有することもできません。それでもその人が『夢を見た』ということに疑う人はいません。」

と綴っている。その「夢」は江戸時代では売り買ひされていたという。

本書には、二十三編のエッセイが収録されていて、私たちが日常生活で見失った、時空を超えた精神世界について綴っている。

たとえば、「孤独であることの勇氣」とのコラムには、

「知人の精神科医が、今の日本人にと

読書案内

松田 銘道



安田 登著

『見えないものを探す旅』

亜紀書房

定価一六五〇円

って重要なのは、『孤独であることの勇氣』ではないかと言っていた。いじめの問題や少年犯罪、そして大人社会においてもこの力の欠如は様々な問題を引き起こしている。……かつて日本人は、孤独の中で自然と一体化するすべを知っていた。それは、姥捨て山に捨てられた老女という絶対の孤独者であってすらだ。そして、それは芸能として長きに亘って人々に、老とは何か、孤独とは何かという問いを投げかけていた。」

と、孤独に向き合う勇氣大事さを綴っている。また、「待ちあたり」では、

「漢字の右側（寺）は手でぐっと掴まえる意で、左側の（イ）は道を表わす『待』という漢字自体が、道に佇んで相手のことをじっと待つという意味だ。……コンピュータの性能がよくなり、処理速度が速くなればなるほど、コンピュータの前での待ち時間に対する耐性が弱くなるという統計があるそうだが、快適になればなるほど、イライラがつのるといふ。」

と、ストレスが増幅する社会で、待ち続けることの意味を綴っている。

質問箱 (12)

【質問】最近、仏教各派においても慈善事業に力を入れているところが多いようです。しかし、御書を拝しても、日蓮大聖人は、道を作ったり橋を渡したりする慈善事業に尽力した極楽寺の良観房のことを、僭称増上慢と批判しています。そのことから見れば、当宗においては慈善事業などに務めるのは良くないということでしょうか。どのように理解すべきでしょうか。

【答え】慈善救済の事業は、宗教的事業の全体ではありませんが、その重要な事業の一つであることは間違いありません。ことに法華經の教えは、現世の生活を決して軽視するものではなく、また人道についても軽視するものでもありませんから、慈善事業も決して軽んじているものではありません。ややもすれば死後の来世のことだけを重要視していると思われがちな宗教が、現世においても善行を勧めるようになるのは、確かに大切なことといえます。

昨今では、慈善事業といえばキリスト教が大変熱心であるように捉えられています。元々は靈を貴んで肉体を賤し、現世の生活を軽視して、天国にのみ憧れたのが、原初的なキリスト教の姿であり、

それが近世に入ってようやく目覚めて、天国の生活を得ようとするには、神の愛に倣って、人々が相愛し相救うことに務

めるべきであると、改めて慈善事業に力を入れるようになったのです。

その中で、物質的文明の著しい進歩にもなつて、生存競争が激しくなり、人心が日々に險悪になりつつあることを、慈善事業を勧めることにより、人心を和らげ、罪惡を未然に防ごうとした功績は大きかったといえます。

その影響は、日本の国が西洋文明を取り入れると共に人心が險悪に向かうことが、西洋よりも更に甚しいものであったことから、その影響を受けた仏教各派には、仏様の慈悲を身に体し、各種の慈善事業に力を用いることは、大変喜ばしいことと捉えられたのです。

慈善事業の方法は、元はその多くを西洋に倣ったといっても、その精神は決し

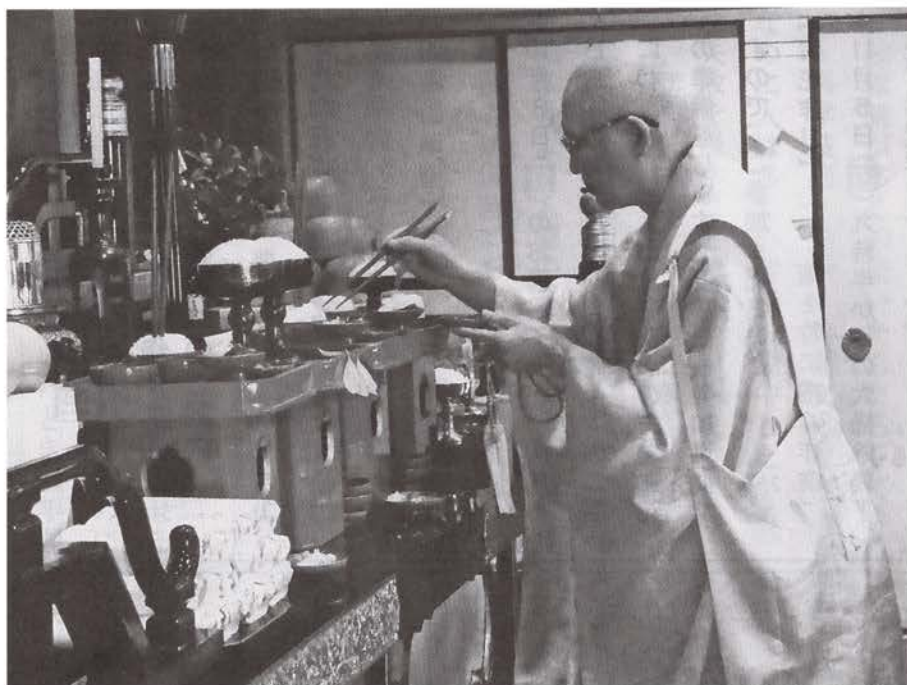
てキリスト教に倣ったのではなく、仏様の慈悲を体して、救済事業に力を用いることは、実は古来よりその例は多いものであったのです。

ただし、このような慈善事業のみをもつて宗教的事業の全体であると捉えるのは誤りで、宗教において最も大切なのは、正しい信仰を得ることであり、信仰は我われの身心のすべての活動の基礎であるべきです。誤った信仰の上に立つならば、一切の活動のことごとくが誤りに帰し、その生活はまったく意義のないものとなってしまふでしょう。

つまり、人を誤った信仰に導くものは、たとえ多くの困難を取り除く世間的な慈善事業であっても、その功績だけでその罪を償ふことはできないのです。

日蓮大聖人が、良観房を非難されるのはこの意味合いからであつて、その法の正しいことこそを重んじられたのであり、決して単に慈善事業が無用だといわれているのではないことを、知らなければなりません。

もちろん慈善事業に名を借りて、自己の名聞名利を求めるといふのは論外で、断じて排斥すべきことです。



恵日だより

御難会

九月十日(日) 午後一時

宗祖日蓮大聖人の、発迹頭本という重要な意義を含んだ竜口法難の、御報恩のために奉修される御難会が、今年は十日(日)と十三日(水)のお講の日に併せて奉修されました。

九月も半ばに入りましたが、連日残暑厳しい日が続いており、この日も朝から晴れわたり、三十度を超える暑い一日となりましたが、ちようど講話の最中に、一時的に結構な雨が降り、法要が終わった頃には、雨も止み、暑さも一段落しました。

法要は、午後一時、出仕



心を込めてご報恩の読経唱題(御難会)

鈴の鳴り響く中、ご住職が出仕され、法難ゆかりのぼた餅の供えられた御宝前にて献膳の後、読経唱題と如法に奉修され、その後、ご住職より「白米一俵御書」を拝しての講話がありました。

法要終了後は、竜口法難の際に、さしき 杖敷の尼が大聖人にぼた餅をご供養された故事に由来して、ご宝前にお供えされたぼた餅が参詣の方々に配られ、参詣者は笑顔の内に帰路につきました。

案内 お知らせ

*お会式準備（お花作り）
参加へのご案内

※恒例のお会式の準備のため、左記のよう
にお花作りを行いますので、ご協力を
お願いいたします。

【お花の準備】（花・つぼみ・葉などの作
成）

◆10月8日（日）のお講終了後と、11月1
日（水）のお経日の前（12時半）の二回
にわたり、婦人部及び有志の方でお花
の準備をします。どなたも参加可能で
すので、ご参加ください。

【お花作り】（花・葉を竹に捲く作業）

◆11月5日（日）九時半からの大掃除終了
後、お花作りをします。

大掃除と共に、なるべく多くの方の参
加をお願いします。

※なお、当日は、昼食（お寺で準備）を
挟んでの作業となりますので、準備の

【神無月詠草】

赤禪たすき 体育祭に使ふらし

〔和風〕

娘は夜なべの ミシン踏みをり
あれこれと 注文つけつつ 段カット
委ぬる二女と 鋏持つ長女

【恵日俳壇】

〔農婦〕

鶏頭の触れみて種の限りなし
炭の赤ほどなく秋刀魚おとこ襲ひける

〔森秀之〕

参道に咲き乱れしや秋海棠
多宝塔朝日に映える秋海棠
まだ早い山頂になびく青芒

〔故吉田裕〕

夏負けの卓にころげて茹玉子
声出してひとりの刻や祭笛



都合上、参加可能な方は、あらかじめ源

立寺受付まで知らせ願います。

***南近畿法華講研修会**

参加へのご案内

十一月二十六日(日)午後一時より、

南近畿法華講研修会が、昨年に引き続き、

阿倍野区・聖道寺(最寄り駅:地下鉄御

堂筋線、昭和町駅)において開催されま

す。講員のみなさまには、ご出席をお願

いします。詳細については、次号にてお

知らせします。

宗祖日蓮大聖人御大会式のご案内

本年度の宗祖日蓮大聖人御大会式は、左記の日程にて源立寺本堂にお

いて執り行います。檀信徒各位には、万障お繰り合わせの上参詣くださ

いますようご案内いたします。

御大会式は、本宗最重要の法要です。服装を整えご報恩の真心をもつ

て参詣しましょう。

記

御逮夜 十一月十一日(土)午後六時

御正当会 十二月(日)午後二時

講演 法華寺 藤村道監師

***新年の抱負を募集します。**

毎年、『恵日』新年一月号に掲載される、

「新年の抱負」への投稿を募集します。

役員の方だけでなく、広く講員の皆様方

の投稿をお願いします。

なお、締め切りは第二日曜のお講の日

(十二月十日)とさせていただきますの

で、原稿をお寺に持参されるか、メール

に添付してお送り下さい。

【訃報】

〔大阪地区〕豊中市

清心院 妙佳女 九月二十日 寂

俗名倉田かよ子之霊 行年九十二歳

〔豊能地区〕池田市

蓮成院 妙恵女 九月二十五日 寂

俗名笠野智恵子之霊 行年八十六歳

この度、右の方々がお亡くなりになりました。

謹んでご冥福をお祈りします。

十月の行事

一日(日) 午前九時 講中勤行会・幹事会
午後二時 お経日

八日(日) 午後一時 お講・役員会

十三日(金) 午後一時 お講

※八日のお講の後に、お会式のお花の準備をします。
参加できる方は、お手伝いをお願いします。

※十一月号の継命・恵日発送(10月末)は
「豊能」地区が担当です。
十二月号の継命・恵日発送(11月末)は
「兵庫」地区が担当です。

◆恵日ホームページ活用を◆

『恵日』のホームページが開設されています。
このホームページでは、『恵日』創刊(平成七年三月号)から現在に到るまでの全号が、年代別に分類・収録されており、いつでも自由に閲覧できます。
また、菅野ご住職の著書・著作や、正信覚醒運動に関する重要な諸資料等も多数収録されていますので、
講員各位におかれましては、ぜひともホームページをご活用いただきますよう、ご案内いたします。
恵日ホームページのアドレスは左の通りです。
<https://the-enichi.co/>

恵日 令和五年十月号 通巻三四五号
菅野 憲道
編集兼 池田市槻木町一〇 源立寺内
発行人 菅野 憲道
発行 恵日編集室
〒563-0057
池田市槻木町一〇 源立寺内
TEL(〇七二)七五一一三三五
E-Mail kanno@wombat.zaq.ne.jp
購読料(含送料)年間二〇〇〇円
加入者名 恵日編集室会計
〒振替 口座番号 013801212649